

大谷光瑞のトルコでの殖産事業研究の新資料紹介

ヤマンラル水野美奈子*

Two New Documentary Materials of the Promotion of Silk Industry Carried Out by Kozui OTANI in Bursa

Minako MIZUNO YAMANLAR*

Since 2007 our Ryukoku University research group has been studied on the two promotions of agricultural and silk industry carried out by Kozui OTANI in Turkey. The paper introduces two new documentary materials found after 2015. One is the document concerning about the person named Riza Bey who had introduce Memduh Bey to Kozui OTANI as a business partner of silk industry in Bursa, the other is about Masuzawa-shouten which was the company exported the machines for silk factory.

はじめに

大谷光瑞が新生トルコ共和国で着手した二つの殖産事業に関して、龍谷大学の研究チームが2007年に研究を始動させた時点では、日本国内外での本格的な研究は皆無に等しかった。大谷光瑞のトルコでの動向は、自身が記録した1926年2月8日から1927年1月4日の欧州・トルコ旅行記である「地中海遊記」¹⁾と1928年6月9日から1929年3月11日の欧州・トルコ旅行記である「鵬遊記」に記されていると共に、トルコでの二つの事業に大谷光瑞の代理人として現地で実務を行った上村辰巳や二つの事業で働いた大谷学生たちの紀行文に断片的な様子が記されている²⁾。これらの記録から大谷光瑞がトルコのアンカラで農産事業、ブルサで絹織物事業を実施したことは知られていたが、それらの本格的な研究は着手されていなかったため、研究が開始された当初、トルコ側の情報は全くない状態であった。

龍谷大学の研究グループが2007年から2015年まで断続的に行った現地調査の中で、大谷光瑞がブルサで行った絹織物事業の共同経営者サーフェト・ベイザーデ・メフメト・メムドゥフ・ベイ（以後、メムドゥフ・ベイと表記）の子孫であるギョクチェン家の存在が2008年3月に判明したことは、本格的な研究への第一歩であった。ギョクチェン家が関係文書や工場で使用されていた機械や器具を保存し、更には一族の家族史³⁾を出版していたことは、大谷光瑞のブルサでの殖産事業の研究に光を投じるようになった。その後の研究期間に、研究会、国際シンポジウム、展覧会などを行ない、本格的な研究への初段階を提供できるに至った。なお2007年から2015年の間に龍谷大学の研究チームによってトルコで断続的に行われた9年間の研究調査の報告書一覧は本稿末に補遺：龍谷大学研究チームによる「大谷光瑞のトルコでの殖産事業研究」に関する報告書として付する。

* 龍谷大学国際学部教授

本小論は、2015 年以降、明らかになったブルサでの殖産事業に関する二つの事項を述べるものである。一つは大谷光瑞が、ブルサでの殖産事業で共同経営者となったメモドゥフ・ベイをどのような経緯で知ることになったかという事である。これは、国家再建に外国の支援を求めている新生トルコ共和国と、中東との交易振興を意図していた日本との政治・経済関係を考察する視点から興味深い課題である。他は、共同経営された絹織物工場に紡糸機械や器具を納入した増澤商店の現状である。当時の増澤商店は解散し、現在は新增澤工業株式会社として経営が一新しているが、新会社に保存されていた資料からその一端を紹介したい。

1. 大谷光瑞がブルサの殖産事業で共同経営者となったメモドゥフ・ベイをどのような経緯で知ることになったか

これまでの調査で、大谷光瑞がブルサで絹織物・染織工場を経営するにあたりメモドゥフ・ベイというブルサの有力者をどのような経緯で知ることになったかは明確ではなかった。前出のギョクチェン家の家族史では単に「大使館の仲介で関係を築いた」⁴⁾という表現に留まっている。しかしギョクチェン家の家族史を編纂したシュキユーフェ・ギョクチェン女史⁵⁾は、祖父の兄にあたり独立戦争でムスタファ・ケマル・(アタチュルク) 大統領 (以後、アタチュルク大統領と表記) の右腕となって活躍し、後にトルコの初代駐ドイツ大使となったケマーレッティン・サーミ・パシャの存在に注目していた。彼女はアタチュルク大統領の戦友であり側近であったケマーレッティン・サーミ・ベイが、メモドゥフ・ベイと大正天皇の義兄である大谷光瑞伯爵との間を取りもった人物である可能性が高いという説を述べていたが⁶⁾、それを裏付ける文書資料はなく想像の域を出るものではなかった。ところが今年 5 月、筆者はその説を証明する文書が同家が保存する文書資料から新たに発見されたと言う連絡をシュキユーフェ・ギョクチェン女史から受けた。本小論はその新資料を紹介するものである。

この新資料は、現在の当主メモドゥフ・ギョクチェンの尊母 (スドゥカ・シュキユーフェ・ギョクチェン) が死去された直後に、尊父ハムディ・サーミ・ギョクチェン⁷⁾が息子のメモドゥフ氏 (現在の当主) 宛てに書いた私信である⁸⁾。日付は「1976 年 1 月 18 日、ブルサ」とされている。内容はハムディ・サーミ・ギョクチェンが、娘たちから日本との絹織物工場の共同経営の状況を訊ねられ、それに対する返答として長男のメモドゥフ・ギョクチェン氏宛に会社の状況の概要を記したもので、A4 紙 1 枚にタイプされている。大谷光瑞のアンカラでの農園事業や、絹織物・染織工場の運営状態などには日本側の資料と多少の齟齬があるが⁹⁾、大谷光瑞とメモドゥフ・ベイの共同経営が実現した経緯を明らかにする記述として注目に値する資料である。私信であるため全文の写真掲載は控えるが、以下に翻訳した部分のみの原文を紹介する。(写真 1)

書簡の冒頭で、絹織物・染色工場の始まりを以下のように述べている：

: 1927 senesinde , Japon fabrikasının kurucusu , Japon İmparatorunun Amcası , Könt Otaninin , Ankarada Atatürkle , Atatürk çiftliğinde yaptıkları ortaklığın bozulması üzerine , rahmetli Agabeyimin mektep , askerlik arkadaşı Erkani harp binbaşısı Rıza beyin tavassutile , Könt Ottaninin adamlarından Kammimora memduh beyle tanışırılar . Neticece , 1927 ve 1928 senelerinde Türk-Japon fabrikasının kurulması hususunda mutabık kalırlar .

写真 1 ハムディ・サーミ・ギョクチェンの私信 (部分)：仲介者に関する所のみ。

“1927年に、日本工場の創始者であり、天皇の叔父¹⁰⁾にあたる大谷伯爵は、アンカラのアタチュルク農園でアタチュルクと行った共同経営が頓挫すると¹¹⁾、今は亡き兄¹²⁾の学友であり戦友であった参謀本部少佐リザー・ベイの仲介で、大谷伯爵の随行員の一人である上村とメモドゥフ・ベイが知り合うことになった。その結果1927年-1928年にトルコ・日本工場を創設することで合意した。”

これによると、大谷光瑞がトルコ側の共同経営者としてメモドゥフ・ベイを選んだのは代理人である上村辰巳がリザー・ベイという参謀本部少佐からメモドゥフ・ベイを紹介されたことに起因していることになる。リザー・ベイはケマーレツティン・サーミ・パシヤの学友であり戦友であると記されている。そのケマーレツティン・サーミ・ベイ(1884-1934)は、アナトリア半島北部黒海に面したスィノプ出身で士官学校を卒業後、軍人として名を馳せた人物であり、アタチュルク大統領から信任厚く、独立戦争での功績が評価され、1923年には第二次トルコ大国民議会のスィノプ代議員に選出された。1924年にはトルコ共和国の初代ドイツ大使に任命された。軍籍に留まり最終的には1926年に陸軍中將に昇格したが、大使任期中1934年に病死した。独立戦争の英雄、政治家、外交官として手腕を振るったこのケマーレツティン・サーミ・パシヤ¹³⁾の弟が当該書簡の執筆者であるハムディ・サーミ・ギョクチェンである。彼自身は鉱物・化学関係の技師であり、大谷光瑞の共同経営者メモドゥフ・ベイの一人娘スドゥカ・シュキューフェと1929年に結婚し、1932年にメモドゥフ・ベイが急逝すると、絹織物・染織工場の経営に携わるようになった¹⁴⁾。

ハムディ・サーミ・ギョクチェンの書簡に述べられているケマーレツティン・サーミ・パシヤの戦友のリザー・ベイに関してまだ詳細は分かっていないし、そのリザー・ベイとメモドゥフ・ベイの関係も不明である。またリザー・ベイと上村辰巳がどのような経緯で知り合ったのかも不明である。

実際のところ、ブルサの絹織物事業の準備段階に関しての情報は比較的少ない。日本の外務省に残された大谷光瑞のブルサでの事業に関する報告書¹⁵⁾は工場が竣工した後の記録であって、準備段階に関しての明確な記録はない。例えばアンカラでアタチュルク大統領と会社を設立した際の日付や経緯は日本の外務省の記録に残されているが¹⁶⁾、ブルサでのメモドゥフ・ベイとの契約の日付は日本側の資料には見られない。トルコ側の資料としては、1930年8月16日に上村辰巳からイスタンブールのベイオール第4公証人役場に提出された会社の解散・清算要求書¹⁷⁾に1928年7月5日、1928年11月6日、1929年2月2日付の契約書にイブラヒム・パシヤ家(もう一人の共同経営者フセイン・カヴァラル)、メモドゥフ・ベイ、大谷光瑞、上村辰巳が署名して会社が設立された記述がある¹⁸⁾。

ブルサの絹織物事業の準備段階に関する情報は断片的ではあるが、大谷光瑞自身が残した「地中海遊記」や「鵬遊記」の記述に読み取ることができる。その主な情報は以下のようなものである。大谷光瑞は1926年から1927年にかけての欧州・トルコ滞在中2回ブルサを訪問している。一度目の5月7日から9日の滞在は農業・養蚕の一般的視察に留まったが、11月8日に再度ブルサを訪問した際は10日間滞在し、自らが起業する場所をブルサから75kmのカラジャ・ベイの官有地と決定している¹⁹⁾。それは桑畑の育成から養蚕を視野に入れた一貫した養蚕業を計画したものであった。またブルサが、従業する学生の健康と精神にも最適な場所という配慮も加味した計画であった²⁰⁾。しかし

注 11 で述べたように官有地の租借は実現せず、その計画はあきらめねばならなかった。そこでアンカラのアタチュルク大統領の農場の一部を借りることになったのであるが、そこから再度ブルサでの絹織物・染織工場を創設するに至った経緯は明らかではない。1928 年 6 月 9 日には再度欧州・トルコへ出発する。9 月 27 日にはポートサイドで、トルコから来た上村辰巳と染色技師の鈴鹿次郎が合流し、10 月 5 日にはナポリで注文した染織機械などを受け取っている²¹⁾。大谷光瑞は 12 月 18 日にナポリからイスタンブルに到着する。「鵬遊記」には、ブルサの工場建設は 1927 年末に着工したが天候や機械の荷揚げなどがはかどらず、予定より 4 か月遅れ、4 月 1 日の開業が予定される旨が記されている²²⁾。大谷光瑞自身のこれらの記述は、ブルサの絹織物・染織工場計画が 1927 年の遅くても半ばごろからは具体的な準備に入っていることを示唆している。総資本金 131,109.81 リラの内、日本人側の出資は 70,593.310 リラ、トルコ人側の出資は 60,516.500 リラであったが、土地の購入や工場の建設はトルコ側が、機械と設備品を日本側が負うことになっていた²³⁾。鈴鹿氏の欧州での機械購入は、上に述べたシュキューフェ・ギョクチェン文書に記されていた 7 月 5 日に始まる会社契約やその経営方針に順じたものであることが考えられる。しかし「鵬遊記」によると工場建設は既に 1927 年末に着工が決められていたに関わらず天候等の理由で、1928 年 6 月から 1929 年 3 月の大谷光瑞の欧州・トルコ滞在中に工場の竣工は間に合わなかったと記されている²⁴⁾。上に述べた吉田伊三郎の報告書に記録されている資本金の項目では、土地の購入や工場建設費用はトルコ側が負担することが記されているので、前出のギョクチェン家文書 No.1 に見られる 1928 年 7 月以降の契約以外に 1927 年末の工場着工時に仮契約のようなものがあつた可能性は否定できない。

絹織物事業の準備段階で不明瞭な点の一つは、トルコ側の共同経営者の選択に関する点であった。その為今回ギョクチェン家からそれに関する新資料が提出されたことは大きな意義を有すると考える。しかし、先にも述べたようにメモドゥフ・ベイを大谷光瑞の代理人である上村辰巳に紹介したりザー・ベイと上村辰巳の関係は不明であり、今後更なる研究が必要である。

人脈という観点に焦点を当ててみると、大谷光瑞は日本では本願寺の元宗主であり、大正天皇の義兄であり、東南アジアでの殖産事業の成功が高く評価されていた人物であるという社会的な地位から政界、官界、財界の上層部との繋がりがあり、トルコでは天皇の義兄、伯爵という地位によって知名度が高かった。大阪商業会議所の会頭稲畑勝太郎とは親交があり²⁵⁾、駐トルコ初代特命全権大使小幡西吉や臨時代理大使芦田均とも交流があつた。両大使は経済外交を強調した当時の外務大臣幣原喜重郎の外交方針を積極的に支持していたので大谷光瑞のアンカラとブルサでの殖産事業を全力で支持していた。小幡大使は 1924 年（大正 14 年）11 月 17 日トルコに赴任後、直ちに 11 月 23 日首都アンカラに赴き、アタチュルク大統領に大正天皇の国書を捧呈し²⁶⁾、小幡大使は以降アタチュルク大統領と懇意であつた²⁷⁾。翌年 1925 年（大正 15 年）9 月 6 日に日本帝国海軍の練習艦隊「八雲」と「出雲」がイスタンブルを親善訪問した際、司令官山本英輔中将与懇意であつた小幡大使は、これを歓迎し 7 日にペラ・パラスで大使館主催の晩餐会開催し、10 日には首都アンカラにアタチュルク大統領を訪問し、トルコ海軍大臣主催の晩餐会に臨んだ²⁸⁾。山本中將、ケマル大統領、小幡大使の懇談がフランスでも話題になったことを、フランス全権大使石井菊次郎があえて外務大臣幣原喜重郎に報告している²⁹⁾。その報告では、フランスの新聞に掲載されたトルコにおける親日傾向を論じた記事を石井大使が要約している。その中では、日本の一伯爵（筆者注：大谷光瑞

のこと）による土地購入にも触れ、上記三者の間で積極的な商談が繰り広げられていることが想像されるとしたうえで、トルコは日本が欧州に接近するその足掛かりでもあると述べられている。このエピソードは当時の日本が国家規模で近東から欧州に市場を拡大する様子を描写したものであるが、そこに大谷光瑞の名前が出てくことは、大谷光瑞のトルコでの事業が国家がかりのものに近かったことも示唆していると言えよう。また日土貿易協会の名誉総裁を務めた駐日トルコ大使フアド・ベイも大谷光瑞のトルコでの殖産事業実現のためにトルコ外務省を通じて便宜を払うことを惜しまなかった。フアド・ベイ代理大使は、大谷光瑞に外務大臣テヴフィク・ベイへの紹介状も渡している³⁰⁾。

大谷光瑞の代理人としてトルコに滞在しアンカラとブルサの二つの事業の実務を取った上村辰巳もトルコで幅広い人脈を築いていた。上村辰巳の積極的な行動は、1924年大谷光瑞によって欧州とトルコに情勢調査のために派遣された時³¹⁾から始まっていた。その際上村辰巳はイスタンブールの大使館で笠間果雄代理公使や三浦省吾中佐、澤田中佐などと交友を築いた³²⁾。笠間果雄は前任の特命全権大使内田定槌の後を受けて1923年（大正12年）7月15日に在イスタンブール大使館の一等書記官に就任し、代理公使の役職にあったと考えられる³³⁾。彼が本省宛に送ったトルコの状況や商業関係の報告書の中で特に注目されるのは、1924年（大正13年）8月2日に外務大臣幣原喜重郎に宛てて送った「土耳其絹工業ニ関スル件」で、この報告書ではトルコの絹産業の情報が詳しく説明されている³⁴⁾。政界・財界の上層部に人脈を有していた大谷光瑞がこのようなトルコの産業状態の情報を得ていたことは想像に難くない。上村辰巳は1926年5月に大谷光瑞一行とイスタンブールに到着した様子を記した報告書の中で「．．．小幡大使や、芦田書記官にも久闊を叙さねばねばならぬので．．．」³⁵⁾と記しているところから、経済外交に積極的な小幡大使とは既に日本でも交流があったことが窺われる。トルコ側の人脈も大谷光瑞の代理人という立場から広がったと考えられる。アタチュルク大統領から借り受けたアンカラ農園が稼働するするとアタチュルク大統領自身がしばしば農園を訪問した様子も報告書に記されている³⁶⁾。また大谷光瑞に随行してトルコを視察したり、代理人として事業の交渉にあたったことから、首相のイスメト・イノニユ、外務大臣テヴフィク・ベイ、農務大臣サブリ・ベイ、イシュ銀行（勸業銀行）頭取で後に第三代大統領に就任したジェラル・バヤル（ブルサ出身）などの上層部とも交流があった。フランス語が堪能であった上村辰巳がトルコ要人と容易に意思の疎通ができたことは想像に難くない。

こうしたトルコ社会の上層部の人脈を有していた中で、ブルサでの共同経営者の選択に困難はなかったと考えられる。当時ブルサ随一の名士であったメモドゥフ・ベイの名前が共同経営者として上がったのは両者の環境からしても当然のように思われる。メモドゥフ・ベイはブルサ市民の精神生活を支えたナクシュベンディーとメヴレヴィーの両神秘主義教団の長に立つ家系に属し、オスマン帝国末期の第二次立憲制期に革命派の「統一と進歩協会」からブルサ選出の帝国議会代議員となり、政界引退後はブルサの商業会議所創設者オスマン・フェヴズイ・エツフェンディの令嬢と結婚し、義父の家業である絹織物業に携わるようになった。大谷光瑞とメモドゥフ・ベイの両者ともに著名であり、また両者を取り巻く人々もアタチュルク大統領、ジェラル・バヤル頭取、そしてメモドゥフ・ベイの娘婿の兄として1929年にメモドゥフ・ベイ一族に加わったドイツ大使ケマーレツティン・サーミ・パシャなど錚々たる顔ぶれであった。その為逆に実質的な仲介者が分からないままになっていた。今回新資料である書簡によって、先に述べたケマーレツティン・サーミ・パシ

ヤの戦友であるリザー・パシヤの名前が拳がったことは極めて貴重な情報であると言える。

2. 増澤商店

2008年3月に初めて、ギョクチェン家を訪問した時、「Manufactured by MASUZAWA. & Co. OKAYA. JAPAN」と金属製ネーミング・プレートが貼られた天秤型計量器具、分銅、デニール計器、竿型天秤など増澤商店から購入された計量器がギョクチェン家オフィスに展示されていたのを見て、私たちは驚きを隠せなかった。その後、当主のメモドゥフ・ギョクチェン氏は倉庫に収蔵されていた機械類などを改めて整理し、増澤製作所の機械を復元した。それらは紡糸機械類であるが、多くの個所に焼き印、墨書き、铸造など素材に応じて会社名が付せられていた。増澤商店から1929年（昭和4）8月に送付された入荷記などはまだ開封されないまま保存されていた。これらは2010年のブルサでの展覧会で展示され注目を集めた。繰糸機には「MASUZAWA CO. OKAYA JAPAN JUNE 1928」と明記されたものもあった。（写真2）ブルサの絹織物・染織工場と増澤商店の関係は今後の研究課題として残された。そのような状況の中で本年5月、大谷光瑞のブルサの工場に染色技師として派遣されていた堀越武雄の孫にあたる八田万由美さんから、新增澤工業株式会社が岡谷にあること、また代表取締役社長の星野伸男氏との連絡もとれたという話を頂いた³⁷⁾。5月29日来日中のシュキューフェ・ギョクチェン女史、八田さんと共に岡谷を訪問し、まず新增澤工業株式会社社長星野氏を訪問した。星野氏のご配慮で、岡谷市市長今井竜吾氏、岡谷商工会議所会頭林伸一郎氏、岡谷蚕糸博物館館長高林千幸氏を表敬訪問することもできた。ブルサの大谷光瑞とメモドゥフ・ベイの共同経営の絹織物工場に関しての情報は岡谷には知られていなかったもので、その歴史を紹介するとともに増澤商店の機械や器具がブルサに輸出されていたことを説明した。

星野社長から現在の新増澤工業株式会社は1961年（昭和36年）に増澤工業株式会社の営業権と製作権を継承して設立された全くの新会社であるとの説明を受けた。現在の新増澤工業株式会社は製糸機械製造とそこで培われた溶接加工技術を活かした各種自動化装置の溶接部品の製造・販売を行っている。増澤商店時代からの資料は残っていないそうであるが、星野氏から増澤商店時代に発



写真2 ブルサの絹織物・染織工場で使用されていた増澤商店の1928年6月付紡糸機械（部分）

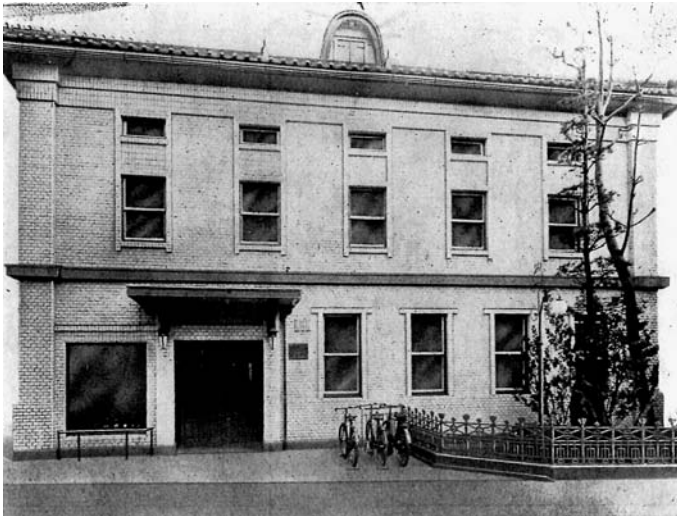


写真3 増澤商店の岡谷営業部（現存せず）

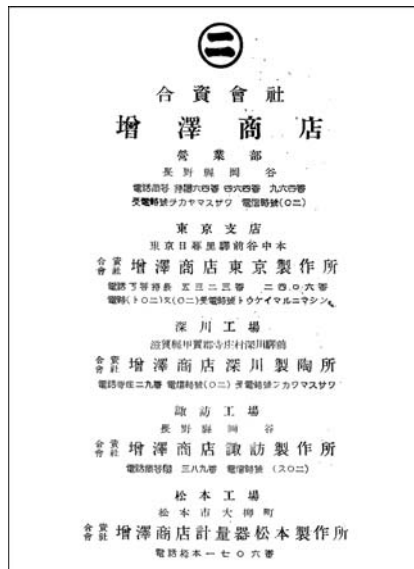


写真4 合資会社増澤商店の所在地

行されたカタログに残された当時の写真資料のコピーをご提供頂いた³⁸⁾。(写真3, 4) 蚕糸産業で栄えていた岡谷とブルサの関係、そして大谷光瑞の絹織物工場と岡谷の増澤商店の関係は、日本とトルコの絹産業史の一隅をなすものであるので今後の研究課題としたい。

以上 2015 年以降に判明した二つの事項を紹介したが、いずれも研究課題が残されており、今後の研究を期待したい。

注

- 1) 「地中海遊記」, 「鵬遊記」共に大谷光瑞が旅行中に雑誌『大乘』に連載したものであるが、本稿では『大谷光瑞全集』第9巻, 大乘社, 昭和10年(1935)に纏められたものを参照しているため、頁表記も全集のものに準じている。

- 2) 大谷学生による記録に関しては、本稿末補遺に挙げた報告書 6) を参照。
- 3) S. Şükûfe G, Akçit/Banu Demirağ, *Manolya Ağcının Kökleri* (泰山木の根), İstanbul, 2000
2007 年に同名の縮小版がイスタンブルで出版。
- 4) 同書 p.122
- 5) シュキユーフエ・ギョクチェン女史は、現在の当主メモドゥフ（長男はメモドゥフという名前を継承）・ギョクチェン氏の長女で、大谷光瑞の共同経営者であったメモドゥフ・ベイの曾孫にあたる。ギョクチェン家が所蔵する文書書類の管理者でもある。本学の研究に対し多大な協力と支援を頂いていることに改めて感謝の意を表したい。
- 6) Banu Demirağ, 'The life and personality of Mehmed Memduh Bey', 補遺 4) 2010 年シンポジウムの報告書 *Türk Japon Fabrikası : Bursa'ya dokunan tarih 1928/The Turkish Japanese Factory : 1928 History woven in Bursa*, Bursa 2015, トルコ語 p.226, 英語 p.227 この小論の著者は B. デミルアーであるが、注 3) の家族史と同様にシュキユーフエ・ギョクチェン女史の意見が反映されたものである。
- 7) ハムディ・サーミ・ギョクチェンは、大谷光瑞の共同経営者メモドゥフ・ベイの娘婿に当たる。
- 8) 私信であるにかかわらず、資料としての発表と本稿での紹介を許可された現当主メモドゥフ・ギョクチェン氏に感謝の意を表すると共に、研究に積極的な協力を惜しまないシュキユーフエ・ギョクチェン女史にも感謝したい。
- 9) ブルサの絹織物・染織工場の経営に関しては、ギョクチェン家所蔵の資料と当時の駐イスタンブル日本大使館の報告書及び注 1, 2) に挙げた資料が現在のところ主な文書資料である。いずれも断片的なもので工場経営の全容を明らかにするには十分とは言えない。現在の研究段階では工場経営に関する研究は不十分であり、より精緻な総合的研究が待たれる。
- 10) 昭和天皇の時代の系譜からの位置づけと考えられる。
- 11) 大谷光瑞のアンカラでの農園事業は、1927 年 2 月 23 日にアタチュルク大統領所有の農地の一部を租借する契約をもって正式に稼働した。国会公文書館アジア歴史資料センター（以後、JACAR）B 09041286500。この農場経営が何時まで継続したか現時点では明らかでないが、大谷光瑞の代理人を務めた上村辰巳は、アタチュルク自身がしばしば農場を訪問していたことを記している。『大乘』7 卷（1927 年）2 号 pp.70-71。これらの諸記述から 1927 年にアタチュルク大統領との農業事業が破綻していたとは考えにくい。しかし、アタチュルク大統領との共同経営の実施以前に、大谷光瑞は、1926 年ブルサの官有地「カラジャ・ベイ」農園の租借を希望し、農具を購入するなど準備をしたが結局許可が下りなかった。JACAR B 09041286500／上村辰巳「最近の土耳其」『大阪商業会議所 月報』252 号（1928 年）p.2。ハムディ・サーミ・ギョクチェンの記述は、このブルサ「カラジャ・ベイ」農園を租借できなかった件との混同とも考えられる。
- 12) 亡き兄とは、ハムディ・サーミ・ギョクチェンの実兄でケマーレットイン・サーミ・ベイを指す。
- 13) ケマーレットイン・サーミ・パシヤの経歴等に関しては、S. Şükûfe G, Akçit/Banu Demirağ, pp.75-89
- 14) 同書 p.18/Türk Japon Fabrikası : Bursa'ya dokunan tarih 1928/The Turkish Japanese Factory : 1928, p.127
- 15) 1) 1929 年 8 月 7 日付で臨時代理大使芦田均が外務大臣幣原喜重郎に送付した「日土合弁絹織物会社創設ニ関スル件」JACAR B 09041411500：この報告書は 1929 年 8 月 4 日にブルサで行われた工場落成式の報告である。2) 1931 年 8 月 16 日付で特命全権大使吉田伊三郎が外務大臣幣原喜重郎に送付した「日土織物会社業務状況報告ノ件」JACAR B 0904143320：この報告書は工場の当時の状況をかなり詳細に記した報告書である。
- 16) 1927 年（昭和 2 年）3 月 28 日付で特命全権大使小幡西吉が外務大臣幣原喜重郎に送付した「大谷光瑞ガ土国大統領ケマル・パシヤト土国小亜細亜ニ於テ農園経営ニ関スル報告ノ件」JACAR 09041286500
- 17) 実際には会社の解散は実施されず、この要求書が提出された翌年の 1931 年に生産高が上昇した。
- 18) シュキユーフエ・ギョクチェン文書 No.1
- 19) 「地中海遊記」p.559
- 20) 同書 p.558
- 21) 「鵬遊記」, p.403
- 22) 同書 p.440
- 23) 注 15) の 2) の吉田伊三郎報告書
- 24) 「鵬遊記」, p.440。上に述べた吉田伊三郎の報告書に記録されている資本金の項目では、土地の購入や工場建設費用はトルコ側が負担することが記されているので、1927 年末の工場着工時期に仮契約のようなも

のあった可能性は否定できない。

- 25) 稲畑勝太郎『欧亜に於て』日本評論社、1929、p.244
- 26) 小幡西吉傳記刊行会編『小幡西吉伝記』小幡西吉傳記刊行会、昭和32、p.345-346
- 27) 同書 p.349
- 28) 同書 p.351
- 29) フランス全権大使石井菊次郎が1926年（大正15年）12月14日付で外務大臣幣原喜重郎に送付した「日土関係ニ関スル新聞記事切抜送付ノ件」
- 30) 上村辰巳「亜細亜トルコ巡禮記」（二）『大乘』第5巻 第拾一號 十一月（1926）p.65.
- 31) 大谷光瑞とトルコ調査に行く2年前に建国直後のトルコを訪問した件に関しては、『大阪商業会議所月報』252号（1928年3月22日に行われた講演記録）p.1
- 32) 上村辰巳「亜細亜 トルコ巡禮記」『大乘』第五巻 第拾號 十月 p.88.
- 33) 松谷浩尚『日本とトルコ：日本トルコ関係史』資料1・5・3：歴代駐トルコ日本国大使 p.97.
1923年日本がローザンヌ条約を批准した後、1925年3月に大使館が正式にイスタンブルに開館された。日本は1921年4月から特命全権公使 内田定槌を送り、イスタンブルに在トルコ日本国政府代表事務所を開設した。したがって笠間果雄が一等書記官として在職中は事務所が置かれていてまだ大使館ではなかったが、ここでは便宜上大使館とした。
- 34) JACAR B 11091412700
- 35) 「亜細亜トルコ巡禮記」大乘第5巻 第拾號 十月、p.87.
- 36) 上村辰巳「トルコに於ける私等の農園生活片々（二）」『大乘』7巻（昭和2年）2号、p.70
- 37) 新增澤工業株式会社の存在を報告いただいた八田万由美さんに感謝の意を表する次第です。
- 38) 岡谷の代表者の方々ととの面会に労をとっていただいたと同時に資料提供頂いた星野伸男さんに改めて感謝の意を表します。

補遺：龍谷大学研究チームによる「大谷光瑞のトルコでの殖産事業研究」に関する報告書と成果

1. ヤマンラール水野美奈子「トルコのギョクチェン家所蔵の七宝花瓶に関して」龍谷大学 国際社会文化研究所 紀要 第15号 平成25年6月
2. 「世界の中の日本・日本の中の世界（2007-2009年）：イスタンブル旧総領事館と日本の文明開化思潮」『龍谷大学 国際社会文化研究所 紀要』第16号 平成26年6月 pp.9-59
 - I. イスタンブル旧日本総領事館の歴史に関して
長場 紘 「日本とトルコ：国交樹立に活躍した人々」
村松 伸 「在外公館建築とその戦略的意義：旧在イスタンブル日本領事館の今後への提言」
パオロ・ジラルデッリ／ジラルデッリ青木美由紀「中東の日本大使館：日本国イスタンブル旧総領事館の建築と歴史」
 - II. 大谷光瑞のトルコ・イスタンブルでの動向とブルサ市における絹織物工場
永田雄三／佐野東生／ジラルデッリ青木美由紀／ヤマンラール水野美奈子
「大谷光瑞のブルサとイスタンブルでの動向に関する基礎調査：ギョクチェン家新資料を中心に」
嵩 満也 「大谷光瑞の生涯」
三谷真澄 「西域文書が結ぶ日本とトルコ」
鈴木 董 「メフメト・メモドゥフ・ベイと大谷光瑞：トルコの古都ブルサにおける二人の紳士の出会い」
ヤマンラール水野美奈子 「大谷光瑞と大阪商工会議所」
3. 「ブルサにおける初のトルコ・日本産業提携：ギョクチェン家と大谷光瑞」展の開催
2010年9月15日～12月末日 於：ブルサ市立博物館
日本外務省の「2010年、トルコでの日本年」の参加事業として上記展覧会を開催。ギョクチェン家が所蔵するトルコ・日本絹織物工場の資料文書・機械・器具などと共に、日本からは大谷光瑞を紹介する写真や文書資料、大谷探検隊が請来した織物の複製などを展示
4. 「ブルサにおける初のトルコ・日本産業提携：ギョクチェン家と大谷光瑞」展記念国際シンポジウム
2010年9月15日 於：ブルサ市立博物館
発表者：上山大峻、嵩満也、三谷真澄、鈴木董、白井進、ヤマンラール水野美奈子
Sükûfe Gökçen, Nurhan Atasoy, Selçuk Esenbel, Yusuf Oğuzoğlu, Neslihan Dostoğlu, Zeren Tanındı, Mi-

yuki Aoki Girardelli

5. シンポジウムの報告書： *Türk Japon Fabrikası : Bursa'ya dokunan tarih 1928/The Turkish Japanese Factory : 1928 History woven in Bursa*, Bursa 2015
6. 『大谷光瑞のトルコでの動向～「仏教」と「農業」のあいだ』(2014 年～2015 年)
龍谷大学 国際社会文化研究所 共同研究プロジェクト 研究成果報告書
嵩 満也 「刊行の辞」
上山大峻 「大谷光瑞とトルコ」
ヤマンラール水野美奈子 「大谷光瑞の新生トルコ共和国における二つの殖産事業」
三谷真澄 「大谷探検隊とイスタンブル大学図書館所蔵文書について」
ヤマンラール水野美奈子, 三谷真澄, 嵩満也 「大谷光瑞トルコ関係年表」